

## フレーゲ再考—意味・意義・真理・発話の力

野本和幸

(東京都立大学名誉教授・創価大学名誉教授)

本年のテーマは「分析哲学史」、特にその原点の確認にあるそうです。このテーマ設定に私は大変共感します。Th.クーンの「科学革命」(1962)以来、科学哲学と科学史(科学の先端分野との交流と並んで)との交流・融合がかなり進みました。1930年代のウィーン学派のような「論理・数学と実証科学以外は形而上学として排除する」といった狭隘な「論理実証主義」と対比すると、1950年代の後期ウィトゲンシュタインやオックスフォードの日常言語分析派から、「分析哲学」という呼称が一般的になってきます(特に、大陸の現象学・解釈学との対比でそう称されますが)。しかしその学派の起源であるフレーゲ、ラッセル、初期ウィトゲンシュタイン等に立ち帰って考えれば、「分析哲学」は、言語分析に終始するものではなく、論理・数学・諸科学と密接に連携する広い射程をもつ哲学的営為に対する呼称のほうです。英語圏、特にアメリカでは、ほとんど「哲学 philosophy」と同義の広い意味での呼称のように解されていて、「メタフィジックス」「オントロジー」「エピステモロジー」も盛んに議論されており、わざわざ「分析哲学」とは呼ばないのが一般的でしょう。「現象学」「実存哲学」「解釈学」等が、むしろ哲学の特殊部門ないし特定の接近法のように解される傾向があります。

私の研究史を回顧させて頂くと、1960年代後半の京大院生の頃に、カント研究から、新カント派のリッケルト、またウェーバーの方法論集や、カルナップ、ポッパー、ヘンペル等を若干齧って、ラッセルや初期ウィトゲンシュタインに遡り、京大哲学科の図書室で、チャーチ先生の *Introduction to Mathematical Logic, Vol. I* (1956)での序論や、W. & M. Kneale, *The History of Logic* (1962)の Frege の紹介、Anscombe & Geach, *Three Philosophers: Aristotle, Thomas, Frege* (1951)を発見し、フレーゲの哲学論集の英訳(1952)や、パーツィヒ編のフレーゲ哲学論集(1962)の刊行を知ったのです。以来、フレーゲの論理・意味論・言語哲学の全体像の把握とその後の展開を何冊かの拙著で追跡してきました。また論理・数学の哲学については、先行・並走のデデキント、シュレーダー、ヒルベルト、後続のゲーデルのメタ数学、タルスキの真理論・モデル論、カルナップ、モンタギュー等の意味論について、原テキスト・講義録等に戻って解説中で、ようやく全体像が見えてきた所です。

今日は、その次著のほぼ最終章に当たる部分の一部、フレーゲの論理的意思論について、お話しさせていただきます。」

## I. フレーゲー-ラッセルの対比と輻輳

フレーゲー-ラッセル往復書簡[1902-03]における、二つの中心的な論題は、(1)いわゆるラッセル・パラドクスと、(2)論理学の哲学、ないしは論理的意味論の問題である。二人の間には(2)についても、根本的な対立がある。

1. ラッセルの『数学諸原理 PoM』[1903]では、単称名辞が本来的固有名と表示句・記述句とに区別される。本来的固有名には直知/面識 *acquaintance* による知、記述句には記述による知が対応させられる。しかし表示句の表す表示概念 *denoting concept* を巡る困難の回避のため、ラッセルは、“On Denoting”[1905]において、確定記述句を一意的な存在量化文に解体する、いわゆる「記述理論」を提唱する。(野本[1888]2章2)

(だが「記述理論」に対しては、ストローソン[1950]の指示的表現 *referring expression* としての記述句、ドネランの指示的使用 *referring use* の提起[1966]があり、その後1970年代から今日まで、ある面で初期ラッセル的なクリプキ・パトナムの単称名辞論およびカプラン・ペリーの直接指示論と、ダメットやエヴァンズのフレーゲー擁護論の対立のように、フレーゲーとラッセルの対立には繰り返し論争を引き起こす起爆力を維持し続けている。[野本 2012]参照))

2. カプランによれば、ラッセルは、「言語を [客観]世界的対象 *worldly objects* および世界内的対象の性質、関係、状態についての表記の体系 *a system of representation* と見なした。

一方「奇妙なことに、フレーゲー理論はラッセルの客観的内容への対策を用意していない。・・・文に対しフレーゲーは、意義・思想以外に、意味 *Bedeutung* を付加するが、付値されたのは外延 *extension* である。しかし外延はラッセル流の世界的客観内容 *worldly objective content*—ラッセル流の命題—を飛び越す *jump over*。」と云う。(Kaplan[2012] Cl.12,p.160)

だがカルナップ流の、カプランのフレーゲー解釈は再検討を要する。

## II. フレーゲーの論理的意味論

以下フレーゲー意味論の概略を、『概念記法 *BS*』[1879]、『算術の基礎 *GLA*』[1884]、論文「意義と意味 *SB*」[1892]、『算術の基本法則 *GGA.I*』[1894]等で再考する。

### 3. フレーゲーの意味論の出発—*BS & GLA*

現場の数学者として、フレーゲーにとっては、数や幾何学的対象の異なる表記が同じ対象を確定する、という再認文が初期から問題の中心である。

3.1. まず処女作『概念記法 BS』 [1879] §8 を瞥見する。

3.2 『算術の基礎』 [GLA[1884]] の「文脈原理」でも、‘A=B’ という再認文の「再認条件」が探策される。① 幾何学的図形 A, B の形の再認条件はその相似性  $A \sim B$  に、② 射影幾何学での直線  $l_1, l_2$  の「方位」（「無限遠点」）の再認規準は、 $l_1, l_2$  の「平行性(//)」に求められる。③ 基数の「再認文」は、数等式：「概念 F の基数と、概念 G の基数との同一性」に求められ、その再認条件は、概念 F と G の同数性、一対一対応に求められる。

3.3 意義の公的な導入—「意味と意義について」 [SB] [1892]

「宵の明星」と「明けの明星」の意味 *Bedeutung* は同一だが、その表現の意義 *Sinn* は同じではない。記号の差異は表示されたものの与えられる様態 *die Art des Gegebenseins des Bezeichneten* の区別に対応する。次に意義把握の一面性と共有性および意味についての語りには、意味の現存 *vorhanden sein* を前提する *voraussetzen* だけで必要十分であるとされる。さらに例えば再認判断「宵の明星=明けの明星」の解明は、天文学上の発見 *entdecken* という認識の脈絡におかれる。再認には「特別の認識活動 *besondere Erkenntnistat*」を要する。こうした「特別の認識活動」には、地理学・天文学上の観察や実験などの経験的探究のみならず、幾何学・算術での証明手続きのようなア・プリオリな場合も含まれる。

3.4 『算術の基本法則』 [GGA][1893] の意味・真理・思想について—真理条件

4. フレーゲの真理条件意味論の検討—客観世界への投錨と「上からの記述」

4.1 フレーゲの真理条件意味論—タルスキの真理定義を逆転した、デイヴィドソンの「翻訳」依存の意味理論（「下からの表現 *expression from below*」）の、「根源的解釈」での無効性、

フレーゲの真理条件：「文 ‘ $\Phi(\Delta)$ ’ が真であるとは、対象  $\Delta$  が概念  $\Phi(\xi)$  の下に属するという

条件 *Bedingung* の充足 *erfüllt sein*、事態・情況 *Umstand*  $\Phi(\Delta)$  の成立・実現の場合である。」

（カプランの「上からの記述 *description from above*」？）

4.2 フレーゲ意味論の客観世界への投錨

4.3 固有名・指標詞・指示詞—世界・自己・他者との遭遇

フレーゲの文脈的表現の意義：「発話状況の知見 *Kenntnis*」—妄想、認知症、二重人格症等の意味論的説明可能性→「意味の理論 *theory of Meaning*」? C f. カプランの「直示語 *Demonstratives* の意味論 *Semantics*」の補足？

4.4 発話の力 *Kraft* と発話内行為 *illocutionary act*—推論・判断における「主張力」